

てびねり

十二月号

平成21年12月1日発行
株式会社ゆしま陶助

有田の妙技 欧州で輝く

日本磁器ヨーロッパ輸出350周年記念

パリに咲いた古伊万里の華

会期 10月10日～12月23日
会場 東京都庭園美術館

毎月地元の上野公園に点在する美術館を中心に紹介していますが、今月は港区白金台にある東京都庭園美術館で江戸時代にヨーロッパに輸出して人気を博した古伊万里の展覧会が開かれていますので紹介します。

白金台にある旧朝香宮邸の庭園美術館にところ狭しと展示されている輸出用に作られた古伊万里の里帰り展です。最初は中国磁器のまねごとだった古伊万里も東インド会社などを通して、ヨーロッパの王侯貴族にもはやされるようになり、急速に発展しました。

古伊万里に魅せられた薄井文夫氏(パリ在住)のコレクション165点です。12月23日までの開催。広い庭園の紅葉も今が見ごろです。

写真 豪華な古伊万里の逸品と瀟洒な庭園美術館正面



輸出の期間は寛文時代(16607年)から享保時代(1757年)までの百年弱でしたが、白磁がまだ無かった欧州の王侯貴族を虜にしました。その後、復活した中国景徳鎮磁器との価格競争に敗れ公式輸出が終わりましたが、江戸幕府による貿易制限やオランダの衰退、マイセンなどヨーロッパの磁器の台頭なども大いに影響しました。(下の銀杏の写真を含め26日撮影)佐藤

◆今月の制作風景

□中原玲子さん
煮物鉢の形を整えています。



□中河政子さん
大きな鉢カパーを削っています。本当に大きいですね。



□大塚美智江さん
釉薬掛けの準備完了!



□菅野満雄さん
親睦ゴルフ「だるま会」のトロフィーを、ご自分でもらう積もりで、心を込めて製作中です。



□小窪猛さん
ロクロで小さなふた物の形を整えている所です。小さいのは削りも微妙です。



□渡邊美知子さん
大胆に削りましょう。



□畑山菊恵さん(右)
□奥田智美さん(左)
畑山さんは絵皿の削り。奥田さんは表札の釉掛け。



□柿沼ひろみさん
お皿の削りです。



□石黒郁子さん
慎重に花入れの削り。



□山口和江さん
小さな小物の形を整えていますが大変です。



□澤三紀さん
陶芸楽しいです。



□佐々由佳さん
これから釉薬掛けをします。



初級コースご紹介

□大竹由城さん
11月に入会しました。よろしくお願いたします。



今月の作品

□平石規代さん 「急須」



蓋と持ち手の赤絵がポイントの小ぶりの急須です。

□金子裕子さん 「組皿」



弁柄で下絵をした素敵な組皿です。

□田口治喜さん 「三段重」



辰砂釉を掛け還元焼成しました。ふたの彫りがオリジナルで最高です。

□加藤美代子さん 「組鉢」



化粧と弁柄で刷毛目をして透明釉を掛けました。

□中岡公子さん 「絵付鉢」



染付をしたひさご型の色々使える鉢ですね。

□岡部厚子さん 「煮物鉢」

たっぷり入る深めの煮物鉢です。総柄の染付も濃淡があり素敵な仕上がりです。



□吉川睦子さん 「湯呑」



気泡(あわ)を圖案化したすっきりしたオリジナル湯呑。

□菅原淑子さん 「湯呑」



ロクロで初めて作った作品です。白マットでお茶の色が映えます。

□吉川富美子さん 「長板皿」



長さが何と40cmもあります。線を彫り呉須を象嵌しました。
象嵌 = 模様を刻んで他の材料をはめ込む技法。

□保科典子さん 「ぐい呑」



いろいろな釉薬を掛けた練り込みのぐい呑です。

□井口誠子さん 「八角鉢」



伊羅保をスポンジで釉薬掛けをしたすてきな作品です。

□蔡金宏さん 「ぐい呑」



本科に進んで初の作品です。

□宮崎誠仁さん 「丼鉢」



ロクロで作った初の作品。形がよくセンスを感じさせます。

□鈴木勲さん 「植木鉢」



弁柄でアクセントを付けました。

年末年始のお知らせ

年末は**12月27日(日)**まで開講していただきます。
新年は**5日(火)**から開講します。
よろしくお願いたします。

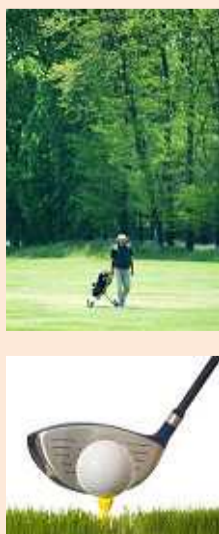
ゆしま陶芸倶楽部

私が勧める美味しい店
誌面との関係で今月は休みます。

見た事・聞いた事・読んだ事

ゴルフと教養

いま日本のゴルフは、石川遼という若千18歳の青年(少年?)が彗星のごとく現われ日本のゴルフ界を席巻しています。世界に出ても殆ど歯が立たない日本のだらしがないプロ達を尻目に今年、賞金王になる勢いで突っ走っています。見事なほど礼儀正しく見ていて我々のほうが少し窮屈になるほどで、まだ十代なのに気の毒だという気もします。私もゆしま陶助のゴルフ会でもこの孫のような石川遼君の話が、高じて知り合いの講師の神田陽司師匠にお願いして「石川遼ものがたり」を作っていた。だき皆で楽しんでいきます。まだ物語になるほどの内容はないのですが、石川遼君の父親の話から始まり、生い立ちなどを調べて話をしていくと思います。江戸時代の話ばかりが多い講師としても、新分野の開拓になるということのようです。



古参の女子プロで清元登子という人は不動裕理、大山志保、古閑美保、を育てたことで有名ですが、彼女が「世界に通用する選手をいかに育成するか」が、これからの日本のゴルフ界の課題だと言っています。それには鍵は「教養」。

ゴルフと教養は関係ないように思えますが、色々なことを勉強し、広い視野を持った教養豊かな選手を育てることが大切だと言っています。日本のプロゴルファーは男女とも少し成績が良くなると、芸能人気取りでゴルフ以外のことに熱心になるし、おかしな服装をしていたり、挨拶や話なども18歳の石川遼君にかなわない感じがします。

世界のプロの試合もリアルタイムに見られる時代になりました。日本の中で通用するのではなく、世界に通用するプロの出現が待ち望まれるこの頃です。石川遼君には、しっかりした教養と実力を身につけて世界に羽ばたいて欲しいものです。(記 佐藤)